

第十回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

## 応募総数

小学生の部	167作品
中学生の部	607作品

## 審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

## 新たな挑戦を

角野 栄子

今年で、「鎌倉文学館こども文学賞」は十回目を迎えました。

コロナで世の中が止まったような日々なのに、子どもたちは自分たちの世界を精一杯表現したたくさんの詩を送ってくれました。その生き生きとしたパワーに、励まされています。

小学生の部、大賞 「ぼくの手」 松田薫さん。表情豊かな作品でした。手っているいろ出来て、とてもすごい。そんな手を持つてる、自分が大好きという気持ち伝わってきます。終わりの三行が素晴らしい。ここからまた新しい「手」の世界が始まるようです。

入賞 「しゃっくり」 伊東美月さん。思わず笑っちゃいました。ユーモアたっぷりの表現に作者の楽しい日常までも感じられました。しゃっくりって困りものだけど、何処かおかしみがありますね。

中学生の部、大賞 「しまうま」 塩田遥菜さん。セイラー服の襟のしましまが動き出し、それはシマウマに変身して、ときに保護色になったり、くっいたら仲良しふうになったりと、その変化がどこか抽象面を見ているようで不思議な感じを持ちました。ほそい線からとてもユニークな世界が広がって、意表をつかれました。

入賞の萱野拓郎さんの「わらび餅」わらび餅と自分。面白い取り合わせがとっても意外。ねっとり、ぼってりしている「わらびもち」をじっと見てたら、自分の心まで見えてきた。そこに深い意味を感じました。

来年はすっきりとした年になる事を願って！

皆さん、新たな挑戦をしてください。沢山の作品をお待ちしています。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「ぼくの手」

鎌倉市立富士塚小学校3年 松田 薫さん  
まつだ かおる

しわしわなのは

プールにずーっと入っているから

あみはにぎらず、

すばやくセミをつかむ

ぎゅっと力強いのは

かたたたきのにぎりこぶし

つなぐことはもうしないから

くねくね、くねくねぬけだす

手首を曲げて力を入れてパソコンを運ぶ

指先がちよつとつぶれる

草むしりもできるけど、

本をかかえてにげ出して、

そーっとページをめくるんだ

中学生の部 大賞 「しまうま」

鎌倉女学院中学校1年 塩田 遥菜さん  
しおだ はるな

友達のセーラー服のえりが  
歩きたびにプカプカする

先輩のセーラー服のえりが  
歩きたびにひらひらする

集まった生徒たちの  
えりの白線が

まるでしまうまの模様みたいだ

しまうまは  
自分のしま模様を使って

仲間と固まって  
ぴったりくつついて  
天敵とかくれんぼをする

私たちも  
しまうまみたいに  
いろんな人たちと  
仲良くくつついて

かくれんぼをしているのかもしれない  
友達と明るい声で  
笑い合いながら

小学生の部 入賞

## 入賞 「しゃっくり」

鎌倉女子大学初等部1年 伊東 美月さん  
いとう みづき

しゃっくりは、ヒクッ

でちゃったときは、ヒクッ

おかあさんとおとうさんに

わっとかいってなおしてもらう、ヒクッ

1、2、11、21、ヒクッ

たしざんやっているけど、ヒクッ

しゃっくりはしゃっくりでとまんない、ヒクッ

しゃっくりとまんない、しゃっくりとまんないよ

あははははははははははは、ヒクッ

おもしろすぎてわらったら、ヒクッ

しゃっくりもつととまんなくなった

しゃっくりしゃっくりいつまでもついてくる、ヒクッ

なおってもなおなくても、ヒクッ

なおなくてもなおにかそれはいい

入賞 「やきゅうをはじめた」

鎌倉市立腰越小学校1年 平田 涼真さん  
ひらた りょうま

やきゅうをはじめた

たのしくてれんしゅうをたくさんした

さいしょはうてなかつたけど

うてるようになった

はじめてうてて うれしかった

わらっているかおになった

まずはバットにあたっただけ

つぎはなんかいもうてた

もっとじょうずになりたいとおもった

つぎはおくにとほせるようになった

もっとバッティングをしたいとおもった

ユニフォームがとどいた

はじめてきたとき うれしかった

せばんごう23ばんもらって うれしかった

あつかったひもあさからゆうがたまで

れんしゅうした

おひるごはんはおにぎり3こ食べた

おいしかった

## 入賞 「はがぬけた」

横浜国立大学教育学部附属横浜小学校1年 目黒<sup>めぐろ</sup> 絢登<sup>あやと</sup>さん

ぼくのはが ぬけた

まわりのみんなは もうとつくに

はが ぬけていたけど

ぼくの「は」は まだだった

でも はが グラグラしていた

ずっと ずっと きになっていた

ずっと きになっていた はが

やっと ぬけて

きにならなくなった

ぬけた「は」のぶぶんから

くうきが ぬけて

こえが ちがうきがした

スツキリした

うれしかった

おとなのはが はえるチャンスがくる

なんだか うれしかった

ぼくの はじめて ぬけた「は」

ちいさくて あかちゃんみたいに

ちいさかった

つぎのはが ひよっこり

かおを だしていた

おにいさんのはが ひよっこり

かおを だしていた

「えいきゅうし だよ。」

おかあさんが おしえてくれた

えいきゅうしくん こんにちは

これから よろしくね

ぼくの はじめて ぬけた「は

だいなものだから

たいせつに ほかんした

ぼくの はじめて ぬけた「は

さようなら

ぼくの はじめての「えいきゅうし

こんにちは

## 入賞 「えだまめごはん」

暁星国際流山小学校2年 矢野 創太さん

知らなかったよ。

おじいちゃんおばあちゃんのとりに住んでいる岩沢さん。

夏休みのある日

「そうちゃん食べて。」

ともってきけてくれたよ。

えだまめごはん。

よだれターラタラおいしーい！

うつわに入れてもってきけてくれたよ。

だいすきなおとうさんおかあさん。

えだまめごはんでおむすびギユギユ。

ゴマをシャカシャカ。

みんながニーコニコ！

またつくるぞー！！

絵をかいたらレシピになっちゃった！

岩沢さんにレシピをプレゼントしたよ。

岩沢さんハッピーピッ！

目をまんまるで、

「かぎっておくよー！」

だっ！

みんなえだまめごはんハッピーピッ！

岩沢さん……ありがとうー！！

## 入賞 「風」

鎌倉市立第一小学校3年 成河なりかわ ゆりさん

風は、いろいろな物がとぶ、やっかい者だ。

いいえ。

風は、とつてもすてきな。

木は、話ができないかわりに、

風にたのんでお話するの。

髪は、風といっしょにあなたをおうえんしてるの。

カーテンは、風を使ってあなたのまわりの人を笑顔にしてるの。

風は、なくなった人を安心安ぜんに天国にとどけてくれるの。

風は、世界へとつながっている。

風は、明日あすへとつながっている。

もし、明日あした世界が終わっても、

風だけは、のこるだろう。

その時風は光かがやく星になっているだろう。

# 入賞 「わたしは考える」

西宮市立南甲子園小学校4年  
大恵 おおえ 朱美 あけみさん

わたしは足で考える

こまっっている人を見た時

頭で考えるよりも先に足が出ている

わたしは手で考える

友達とけんかをした時

だめとわかっていてもつい手が出てしまう

わたしはおなかで考える

さみしい時や不安な時

おなかがキューといたくなる

わたしは顔で考える

好きな人と目が合った時

顔がポツと赤くなる

わたしは目で考える

みんなの前でしかられた時

目からなみだがこぼれ出す

わたしは耳で考える

悪口を言われた時

まわりの音が聞こえなくなる

わたしは心で考える

どうすれば相手がよろこび

どんなことをすればいやがるのか

心が一番知っている

うれしいことも悲しいことも

つらいことも楽しいことも

全部身体が覚えてる

だからわたしは頭だけではなくて

つねに全身で考えている

## 入賞 「神社のガラガラ」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校4年 みつはし 三橋 あやさん

森戸神社のガラガラが消えた

コロナウイルスの感染を防ぐために

取り外されたらしい

私が小さいころから

お正月も七五三もいつのときも

そこにあって

ガラガラ ガラガラ

おさいせんを入れた後の

楽しみでもあった

コロナウイルスはいつおさまるのだろう

今大声で鳴いているセミが鳴き止んでも

きっとまだまだだろう

私の好きなガラガラは

またいつ付けられるのだろう

ガラガラ ガラガラ

あの なつかしい鈴の音を

さみしく思い出す

入賞 「万華鏡」

鎌倉市立第二小学校5年 岩井 咲樹さん

ぽっかり空いた穴の

そのまた向こうで

呼んでる

呼んでる

オレンジいろはお日様の光

赤いろと青いろは宝石

黄いろは・・・

そう、迷子の星屑

ぐるぐるぐるぐる

いろたちは回り、踊り



# 入賞 「楽しいダンス大好きダンス」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校5年

猿丸 さるまる

采芽さん あやめ

ダンスダンス楽しいダンス

私が大好き楽しいダンス

ステップふんでくるっとターン

夏はあせがとびちって

まるで水しぶきのようだ

言葉を体で表し心をこめて歌のように

ダンスダンス楽しいダンス

ダンスを見せると心がスツキリ

いつも体が勝手に動く

いつでもどこでも私の舞台

ダンスダンス大好きダンス

元気にキレよくカッコよく

心をこめて一つにする

ダンスダンスタップステップジャンプ

大きくきれいに命がけ

ダンスは命のようなもの

私はダンスが大好きだ。

## 入賞 「鋼の翼」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校6年 國田 怜さん

「それ」は突然来た。

音もなく、匂いもなく。

息を潜め獲物を狙う獣のように

そおっと、そおっとぼくらに近づいてきた。

「それ」はあっという間にぼくらの翼をつかみ自由を奪った。

「それ」はぼくらの生活を一変させた。

今まで当たり前だったことが、当たり前でなくなり、今まで出来ていたことが出来なくなった

「大声で笑うこと」

「食事中の会話」

「自由な外出」

「友達と遊ぶこと」

「学校へ行くこと」

まるでぼくらは翼を怪我した鳥のようだ。

「考えろ」

「負けるな」

「耐えろ」

「前を向け」

翼は大きな強い鋼の翼に生まれ変わる。

ぼくらを大空へ自由に飛ばたかせてくれる

「それ」は十年後どんな気分でぼくらを見ているのだろう。

「それ」も生きようと新しく形を変え生まれ変わるのだろう。

次はぼくらが新しい鋼の翼を作りだす。

ぼくらは新しい「それ」が表われても絶対に勝つ。

鋼の翼は強い。

「それ」よ。ぼくらは受けて立つ。

人類は「コロナ」<sup>それ</sup>に負けない。

中学生の部  
入賞

入賞 「試験中」

国立音楽大学附属中学校1年

阿保<sup>あぼ</sup>

唯花さん<sup>ゆいか</sup>

教室の窓の外から

かまってちゃんのひとりごとが

みんなの髪を

かすかにゆらす

教室の窓の外から

かまってちゃんの口笛が

みんなの視線を

誘いだす

忘れてた

春の景色へ

入賞 「輝く夏野菜」

鎌倉女学院中学校1年 佐藤 柚音さん

雨が上がった昼

野菜を収穫した

水を浴びた野菜は

とても輝いていた

さらに姿を見せた

太陽の光が

野菜についている水滴に反射し

より輝きが増した

汗をたらしながら収穫した野菜は

ダイヤモンドのように

光っているように見えた

収穫した野菜を

祖母に渡し

料理を作ってもらおうと

食卓にならんだ野菜を使った料理は

今にも食べて欲しそうに

キラキラと

輝いていた

野菜が苦手な私でも

キラキラと輝く

野菜たちに

惹かれ

気がつけば

口に運んでいるほど

おいしく

心も輝いたような

気がした

# 入賞 「ねんど」

京都教育大学附属京都小中学校第7学年 寺内 紗優さん

人と違うと

何か言われそう

そんなことに恐れて

次々と形を変える

自分をなくしてでも

ずっと

芯がない

ねんど

そんなものは

だめだと思ってた

ねんどだって

ずっと置いておけば

固まる

それまで

何度も考え

何度も形を変える

気に入るまで

ずっと

それから私は

ねんどのままにいることにした

何を言われても

ずっと

入賞 「わらび餅」

静岡大学教育学部附属静岡中学校2年

萱野<sup>かやの</sup>

拓朗<sup>たくろう</sup>さん

つるつる もちもち わらび餅

あたたかい日差しも受け流し

いつも曇った わらび餅

つるつる もちもち わらび餅

そんなお餅は 私の心

夏でも厚着 わらび餅

ねじれて曲がった 私の心

人はいつも 曖昧な生き物でしょう？

ゆがんで 冷えたわらび餅

甘い蜜で 私の心に色づけて

## 入賞 「皮」

名古屋市立守山中学校2年

水野 みずの

結雅さん ゆうが

黒ずんだ太鼓の皮が、破れた。

西日の差す居間の隅で、破れていた。

その胴は細長く、羚羊や縞馬の浮彫が笑っている。

多くの紐で結ばれた、幼子の背ぐらいある、異形の太鼓。

手で打つと、野太い音が居間に響いていた。

アフリカの音だった。

二つ打つと、

サバンナが見えてきた

三つ打つと、

野獣の匂いが部屋に広がってきた。

こんなに大きいのに、

こんなにも不思議なのに、

居間の誰も見えていたのに、

誰も見えていなかった。

日本の梅雨のじめじめの中で、

勝手に破れていた。

父が持ってきた時は僕より背が高かったのに、中二の今はその皮も父も見下ろしている。

そして、転校した中学の教室では、みんなその下を愛想笑いで通過していく。

不愛想な自分だと言われる。

髭を剃ってもすぐに伸びてくる。

十四歳になった朝の日に腋の皮を引っ張ってみると、  
向こうが透けてしまいそうなまで、伸びてゆく。

ぱちん。

破れた太鼓の皮の裂け目が  
異国のリズムで笑っていた。

入賞 「いのちいっぱい」

上智福岡中学高等学校2年  
溝口 奏真さん

みぞぐち

そうま

ぼくにはおぼえていない  
いもうとがいた

ぼくは中学2年生で  
いもうとは小学2年生  
のはずだった

ぼくが6さいのとき  
いもうとは生まれた  
ずっと病院にいた

一回だけ会えたいもうと  
毎日写真で会ういもうと

いもうとは  
自分で

息をできなかつた  
おっぱいを飲めなかつた  
ママもパパも見えなかつた

もしも 願いが かなったら  
なにをしたいの

息をしたかった

おっぱいを飲みたかった

うんちをしたかった

ママとパパを見たかった

いっぱい したかったよね

できなかった

そのいのち

ぼくは

いっぱい 生きよう

いっぱい 生きよう

## 入賞 「上にいるあなたへ」

藤嶺学園藤沢中学校3年 糸川 いとかわ 想さん そう

元気ですか。

小さいころから高いところが好きで、電車に乗ったらいつも二階建て車両に乗りたがっていた。

いつも同じ時間の特急に乗っていて、時間を合わせて乗ってみると、いつもそこにいた。

彼は上にいたかった。

高いところから世界を見つめていたかった。

世界を見つめている間、そこに邪念はなく、ただただ誠実な、彼があった。

ある日、彼はそこに乗っていなかった。

次の日も、その次の日も、彼がそこに現れることはなかった。

彼が最期高いところについて、自ら一步を踏み出したと知ったのは、少し経ってからの話だ。

今もまだ、高いところにいますか。

空の、雲の、さらに上へ、

見つめていますか。

あの時のまま、

笑顔ですか。

上にいるあなたへ

下にいる私より

## 入賞 「ジェットコースター」

不二聖心女子学院中学校3年 棚橋 彩心さん  
たなはし さこ

私はいつもいそがしい

なにかしらやらかすから

一日がスリル満点

一見、平らな道を走っているように

見えるけれど

やがて、また上り始める

あーまた上ってしまったのか

早くこのジェットコースターを下りて

今日こそは平凡な一日を過ごすぞ

しかし平凡な一日は

私には訪れてくれない

やっと終点かと思うと

また何かやらかしてしまう

再び急な坂を上り始め

思わず目を瞑りたくなる

ならいつそのこと

このいそがしい日常を

乗りこなしてしまおう

下りる時

ゴーという向かい風を切って

私の道を拓いていく

## 入賞「ある人の良いところ」

慶應義塾普通部3年  
根岸 ねぎし 煌太郎 こうたろう さん

家族のお世話をがんばるところ

拒否してもめげずに駅まで迎えに来るところ

豚汁を作るところ

肌に張りがある気がするところ

いつも笑顔なところ

植物を無限に増やすところ

知り合いがいっぱいいるところ

オシヤレが大好きなところ

なんでも一人でこなせるところ

声がよく通るところ

木登りのお手伝いをしてくれるところ

編み物をやさしく教えてくれるところ

毎日手紙をかいたら毎日返事が来るところ

話をよく聞いてくれるところ

余計な心配ばかりするところ

結婚するときには一緒に連れていこうかな

と言いつつ

祖母はちよつと考えて

その頃にはもう今ほどお役にたてないから

奥さんになる人のおばあさんが若くて元気なら

一緒に住んだらどうかしら

相手のご両親も二つ返事だと思っよ

と笑った

入賞 「成長」

京都教育大学附属京都小中学校第9学年 牧まき 亜里咲ありささん

大人になろうと思ったから

折り紙や絵本を棚の奥に

大人になろうと思ったから

怒りたい気持ちに布を被せ

大人になろうと思ったから

色とりどりの景色にカーテンをかけた

大人になったねと言われた時

心は喜びとさみしさに

ふと

後ろを振り返ると

やわらかでもろい数々は

声を上げずに泣いていた

あの子達の伸ばした手

にぎる勇気を私にください